



戸本一真の イベントイングライフ in UK

2019年7月～10月

vol.10

2019年シーズンも後半。今年はチャンピオンシップがないシーズンなので、失敗を恐れず多くのことに挑戦するシーズンという目標を掲げて活動していますが、実際にたくさんの失敗と成功からいろいろなことを学んでいます。シーズン前半は2つの5スター競技に出場、Tacomaと世界最高峰の Badminton Horse Trials（イギリス）を完走したことは大きな自信となりましたが、その後 Vikenti と参加した Luhmuhlen（ドイツ）では、馬場を終えた時点で首位に立つもクロスカントリーで2拒止されリタイアという悔しい結果でした。

私が騎乗している4頭のうち、現在、東京オリンピックのMES（出場最低基準）を満たしているのは Tacoma のみで、Utopia、Vikenti、Vinci は4*-L（あるいは5*）で MES をクリアしていくしかなければなりません。ここからのシーズン後半は計画通りに進められるよう、しっかり準備をして臨むつもりです。

✿ ホースインスペクション

毎年6月から7月にかけてドイツで開催される CHIO Aachen は世界最大規模の馬術競技会です。その栄誉ある大会に Tacoma とともに参加する機会を得ることができました。

しかし、競技前日のホースインスペクションで左後肢の跛行で失権となってしまいました。夕方行われるインスペクションに向けて、午前中に軽めに運動して馬体をほぐした時も、直前の曳き馬でも異常を感じていなかっただため、まったく予想していなかった結果でした。Tacoma は3年前に大怪我をして手術を受けた影響で、その箇所は腫れたまま固まっており、そのため左後肢の踏み込みが悪く硬い歩様をしています。また、左後肢をかばって歩くせいで、腰にも疲れや痛みが溜まりやすい体质です。その認識はありましたが、「歩様は硬いものの、いつもと変わらない」という感触でした。ホールディング（ホースインスペクションに合格せず、獣医師によるチェックを受けること）になって、獣医師に怪我の経緯を説明し、跛行しているわけではないと伝えましたが、審判団による判断は覆らず、失権となってしまいました。

その時は呆然とし、「跛行ではないのに」という思いでしたが、多くの方からアドバイスや励ましの言葉をいただくうちに「いつもと変わらず硬いだけだから大丈夫だろう」という思い込みこそが、今回の事態を招いた原因であることを自覚しました。これまでにも同じような歩様で合格してきたことで慢心が生まれ、客観的に馬の状態を判断できていなかったのです。運悪く今回の審判団が特別厳しかったわけではなく、このような状態でこれまで合格してきたことが、たまたま運が良かったに過ぎなかつたということです。

イギリスに戻って獣医師と整体師に診てもらったところ、飛節と腰全体に痛みがあることがわかりました。自分の判断ミスにより、このような事態を引き起こしてしまったこと、そして

何より痛みや状態の変化に気付いてあげられなかつたことに対して、Tacoma には本当に申し訳ないことをしたと後悔しています。馬の状態には今まで以上に気を配り、このようなことが二度と起きないように努めていかなければならないと強く心に刻みました。

このことを受けて、改めてホースインスペクションについて、馬のタイプ別の対策をまとめます。馬の歩様は準備や曳き方次第で見え方が変わるものなので、個々の馬の癖を把握して対策することは、大切な戦略の一つです。

《歩様の硬さが目立つ馬》

体をほぐすことを重視します。第1回インスペクション（馬場馬術の前日）は常歩30分程度と軽い運動15分を行い、第2回インスペクション（最終日の朝）は騎乗して運動し体をほぐすようにしています。後肢に問題がある馬は、インスペクションではゆっくりとしたリズムで走らせ、速歩から常歩への移行で硬さが目立たないよう、回転の前で徐々にスピードを落とします。復路は審判団から後肢が見えないため、往路よりもやや早いリズムで走って元気の良さをアピールします。



ホースインスペクションは馬のタイプ別に対策が必要

《歩様に特に問題がない馬》

第1回インスペクションの朝は常歩、第2回の朝は必要に応じて軽い運動をして体をほぐします。インスペクション時には頭（馬体）を真っ直ぐにさせることを意識し、やや早めのリズムで良い歩様をアピールします。

鈍感で自分から走ろうとしない馬は、長鞭を使用して機敏にさせておきます。ただし、興奮させることはありません。逆に、暴れる馬は愛撫するなどしてリラックスさせることを心掛け、本番では特に U ターンの時に時間をかけて落ち着かせるようにし、しっかり回転し切って馬体がまっすぐにになってから徐々に速歩を再開させます。

✿ TOKYO2020テストイベント

オリンピックが1年後に迫った2019年8月、大会会場となる馬事公苑と海の森クロスカントリーコースで、テストイベントが行われ、私は Tacoma と参加しました。馬術のテストイベントは総合馬術のみだったため、各国から障害馬術や馬場馬術の関係者も集まりました。注目されたポイントは暑熱対策です。ヨー



▲東京オリンピックのために造られた
海の森クロスカントリーコース

ロッパを拠点としている馬たちの体調がどのように変化するかを確かめる機会でしたが、私自身も日本の夏が4年ぶりだったため、あまりの湿気に驚いたほどでした。

Tacoma はイギリスの厩舎を出発して、ドイツのフランクフルトから日本に飛ぶというスケジュールでしたが、飛行機での輸送は昨年の世界選手権で経験していたので、準備に戸惑うことはありませんでした。機内も含め輸送中の様子は逐格ルームと連絡を取り合って、馬の状態を把握していたので、日本に着いてからは予定通りにトレーニングをスタートすることができました。

東京2020大会に向けて全面改修された馬事公苑は素晴らしい施設でした。厩舎にはエアコンが完備され、馬房サイズや通路の広さも十分な上に床にはゴムが張られており、馬の安全について十二分に配慮されていました。他国の中でも「これまでにない素晴らしい施設」という評価でした。

Tacoma がインスペクションを受けるのは失権した Aachen 以来だったので、万全を期すために直前まで騎乗して体をほぐして臨みましたが、今回はホールディングになることもなく無事に合格することができました。

馬場馬術競技の朝は6時半から運動して最終調整を行いました。競技に臨むときには、普段通りのことをこなすことが大切だという認識ですが、ヨーロッパと日本の環境が極端に違うため、このような状況ではルーティーンワークに固執するのではなく、その時のベストを見極めて対応することが必要でした。

翌日は海の森に移動してクロスカントリー競技となりましたが、ここで初めて暑さに対する問題を実感することになりました。馬事公苑の厩舎は「やや寒い」と感じるほどエアコンが効いていて、運動後も短時間で回復しているようだったので、疲労を心配する必要がない状態で迎えたクロスカントリーでしたが、Tacoma はコース序盤から反応が非常に悪く、明らかにいつもとは走りが違うという感触でした。「やはり暑さに耐えられないのだろう」と思っていましたが、翌日は予想していたよりも元気で、「昨日の疲労は何だったのだろう?」と思うほどでした。大会後にじっくり考えてたどり着いた結論は、エアコンが効いている馬房内と外気との差が大きすぎたことが原因で、体が動かなかったのだろうというものです。人間でいう“クーラー病”です。そのため発汗機能や体温調節機能がうまく働か

なかつた可能性が高いと感じています。他の選手からも同じような感触だったと聞いており、オリンピック本番に向けての課題となりました。

最終日には馬の疲労度合いはそれほどひどくなかったものの、障害に対する注意を欠き、3落下という結果でした。今回の目的は順位や内容ではなく、輸送から競技会までの一連の流れを経験し、馬の状態がどのように変化するのか、また、本番に向けてどこにストレスを感じ、どんなことが起こるかを知ることだったので、そのような意味では課題が明確になりました。これは実際にヨーロッパから日本に馬を輸送して競技に出場してみなければわからなかつたことだったので、とても有意義な経験となりました。

現段階では誰が代表に選ばれるのかわからない状態なので、今回の経験とそこから得た情報を、障害と馬場も含めた日本チーム全体で共有し、それを踏まえてオリンピック本番でベストパフォーマンスを引き出せる準備をしていくことが重要だと思っています。

◆ 競技会

Vinci

今年（2019年）から乗り始めた Vinci は安定した結果を残しています。7月にアイルランドで行われた CCI4*-L-Cappoquin で優勝することができました。Vinci とは初めての 4*-L でしたが、馬場を3位で終え、クロスカントリーは、馬の体力とどのくらいのスピードでタイムインできるのかを知ることを目的に臨みました。5分を過ぎたあたりから反応が悪くなり始め、後半の5分は、脚を使う→反応して走る→鈍くなる→脚を使う→反応して走る、ということの繰り返しでした。その結果、インサイドタイムでゴールするという驚きの内容で、ここで首位に立ちましたが、障害馬術で1つでも落下してしまえば逆転されるという状況でした。Vinci の調子が良かったので、翌日はタイムインすることを意識して思い切って走行した結果、優勝することができました。初めて 4*-L で優勝した喜びもありますが、タフな条件の中素晴らしい内容で走行して MER をクリアできたことをとても嬉しいと感じています。



▲CCI4*-L Camphire 優勝ステージ
△のジャッキー・ボジンさんとともに

その後、9月に調整のために出場した1DAY ホーストライアルのクロスカントリーで、今までにない不安定な走行になってしまいました。トレーナーの William は「馬が大切な競技とそうでない競技を分けて考えている。トレーニングについても本気になる必要がないとわかると、集中力しないのだろう」との見解でした。良くも悪くも冷静で頭が良い馬であること、そして

戸本一眞の イベントイングライフ in UK

競技では待機馬場やコース序盤での雰囲気を人間が冷静に判断し、必要に応じて馬を鼓舞する扶助を使わなければならぬことを認識しました。

10月にフランスのCCI4*-S Lignieresに出場を予定していたのですが、入厩後に跛行が見られたため棄権を余儀なくされました。イギリスに帰ってから行った検査の結果、軽い屈腱炎が見つかったため、来年の春まで休養させることになりました。これまで順調に来ていただけに来年に迫った東京オリンピックに向けて不安とショックしかありませんが、調整に時間がかかるタイプではないため、様子を見ながら運動再開や競技スケジュールを立てる予定です。

Vikenti

6月にCCI5*-L Luhmuhlenで棄権した後、Williamと相談して、MER獲得を急ぐよりもしっかり調整して9月のインターナショナル競技会に照準を合わせる方針を固めました。その間、馬が障害に対して積極的でありながらもしっかりとコントロールできるよう、ナショナル競技でいろいろなハミを試しました。インターナショナル前の最終調整のつもりで出場したナショナル競技で落馬しましたが、この失敗から使うべきハミやそれにともなう乗り方を明確にイメージすることができ、これまでで一番ポジティブな失敗だったと受け止めています。その後、1DAYホーストライアルで馬場と障害のみ出場して反応を確認してから、当初から目標にしていたCCI4*-L Blenheim（イギリス）に向かいました。

この大会は、2年前にVikentiとのコンビで初めて4スター（当時は3スター）に挑戦し、馬場と障害を終えてトップでクロスカントリーを走り、最終的に0.1ポイント差で2位となった思い出深い大会でした（※本誌2023年2月号で紹介）。2年前は訳もわからずがむしゃらに走り、どこか自分のことではないような感覚でしたが、今回は初めから「優勝」を意識して調整を進めてきました。その結果、馬場では馬もリラックスして運動し、クロスカントリーではたくさんのコントロール性や真直性が問われる障害物がある中、全てプラン通りに走行することができました。2位で迎えた最終日の障害も集中して臨んでクリアラウンドしました。最終順位は2位でしたが、最初から最後まで「優勝」を意識して競技に臨めたこと、準備段階の重要性を改めて学べたことなど、収穫の多い競技会となりました。また、この結果によりオリンピックのMERをクオリファイできました。

Utopia

5月にCCI4*-L Tattersalls（アイルランド）で棄権した後は、7月に1DAYホーストライアルで調整してからVinciと同じCCI4*-L-Cappoquinに連れて行きました。足元に不安のあるUtopiaにとって最終日のホースインスペクションは最大の難関でしたが、無事に合格して障害馬術に進み、目標であったオリンピックMERを獲得することができました。

Utopiaは10月のCCI4*-L Boekelo（オランダ）を予定しており、その調整として9月に2つの1DAYホーストライアルに参加しました。1回目のトライアルの馬場馬術はワーストに近い

スコアで、柔軟性についての指摘があったため、速歩自体の質を向上させるためのトレーニングを行いました。2回目のトライアルではその効果が見られ馬場については大きく改善できました。また、クロスカントリーについても力んだ走行になってしまつた一方で、馬が迷いながらも標旗の間を飛越するという、自分の仕事を理解していることを感じました。馬自身が飛越することを選択していると感じられれば、大きな競技会に向けて馬のメンタルが前向きであるという証拠なので、シーズン最後のインターナショナルに向かう準備はできていると感じています。

Boekeloでは馬場で最低でも減点20台（70%以上）を意識していましたが、物見をして集中力を欠き、減点30.8（69.2%）でのスタートとなりました。クロスカントリーは例年よりもやや難易度が低かったため、自信を持って臨むことができました。また、今まで MER 獲得を優先して足元に負担をかけないようにタイムは気にせずにスピードを抑えて走っていたのですが、今大会では既に MER がとれている、足元の調子が良い、コースが易しい、グラウンド状態も良好という好条件が揃っていたので、タイムを意識して走ることにしました。その結果、インサイドタイムでゴールして翌朝のインスペクションも無事に通過、障害も減点0で終えることができました。

昨年は足元の状態が不安定でコンスタントに競技に出場することができなかつたUtopiaですが、今シーズンは予定していたスケジュールを全てこなし、その中でベストだと思われる調整方法を掴むことができました。

Tacoma

10月にCCI4*-S Lignieresに出場しました。東京オリンピックのテストイベントから2ヵ月あけて、いきなりインターナショナルの4スターでしたが、さすが Tacoma という安定の内容でした。馬場では今シーズンのベストスコアを出し、障害では2落下がありましたが、クロスカントリーではほとんどの選手がロングルートを選択したコンビネーション障害で、練習のためにダイレクトルートを選択したところ、無事にクリアすることができました。

予定では10月末にフランスのCCI5*-L Pauに出場するつもりでしたが、左後肢の歩様が硬く、無理をしても良い結果は望めないだろうということで参加を取り止めました。

✿2019年シーズンを振り返って

Boekeloをもって2019年シーズンの全競技会が終了しました。初めてヨーロッパの競技会で優勝できたことを皮切りに、Badmintonを完走、イギリスとアイルランドの4スターで優勝など、自分の身に起きたことは思えないほど素晴らしい経験をすることができました。そして何より今シーズン最大の目標であった「4頭全てでMERをクオリファイする」を達成できたことを嬉しく思っています。その一方でインスペクション不合格や、Vinciの屈腱炎など反省すべきこともありました。

来年はいよいよオリンピックイヤーです。今シーズン学んだことを活かして日本代表のメンバーに選ばれるよう全力で取り組んでいきたいと思っています。